

茨城県の固定式刺網漁業について

堀 義彦

1 はじめに

茨城県では国庫補助事業である「資源管理型漁業推進総合対策事業」の広域回遊資源調査を、北海道（太平洋側）から本県で構成する太平洋北ブロックの一員として平成3年度より実施している。ブロックの広域回遊資源つまり調査対象資源は、北海道がケガニ、青森・岩手・宮城・福島各県及び茨城県がヒラメである。そして、ブロックでのヒラメを漁獲する漁業つまり調査対象漁業として定置網漁業・底曳網漁業・固定式刺網漁業が挙げられ（表1）、これらのうち本県では底曳網漁業（15トン未満船）と固定刺網漁業（5トン未満船）のヒラメの漁獲量が県総漁獲量の80%以上を占めていることから、両漁業を管理対象漁業として調査を進めている。調査は経済調査と天然資源調査に区分されているが、ここでは天然資源調査の一環として実施した固定刺網漁業の実態調査の二・

三の整理結果を報告する。なお、調査結果の一部については、1992年（平成4年）6月19日に開催された「平成4年度水産工学研究推進全国会議」で紹介している。

報告に先立ち、消費地市場関係の資料を提供していただいた、茨城県農林水産部漁政課水産業改良普及員室鈴木正伸氏に感謝いたします。

2 方 法

水揚日数・同船数及び魚種別水揚量・同金額等は漁業協同組合と水産試験場を結んだコンピューターネットワークで集積された資料によった。また、漁場関係資料は当該事業で依頼した標本船の回答資料のほか、県単独事業等で依頼しているものも加えてある。これらの資料は、太平洋北ブロックの共同調査の申し合わせもあり、主に1991年（平成3年）のものを用いたが、一部1990年及び1992年の資料も含まれている。

表1 太平洋北ブロックの調査対象漁業

県	底曳網漁業	刺網漁業	定置網漁業
青森県	○	○	○
岩手県	—	○	○
宮城県	○	○	—
福島県	○	○	—
茨城県	○	○	—

3 結 果

(1) 固定式刺網漁業の近年の漁獲量、現行漁業制度等の概要

茨城県の固定式刺網漁業には、許可に基づくものと漁業権によるものがあり、前者は県中央部の日立市久慈浜地域及び那珂湊市地域、後者は県中央部の大洗町から県南端部の波崎町（鹿島灘海域）

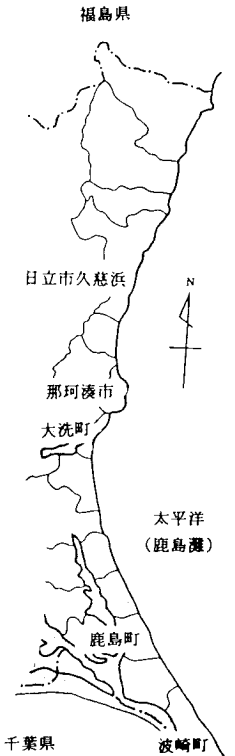


図1 主要地名

の各地先沿岸で操業されている(図1)。経営体数は農林水産統計年報によると1990年現在で、主従事漁家が約130体(県全体の約16%)、営んだ経営体では約300体(同約40%)であり、近年の推移は営んだ経営体が横這いかやや減、主従事漁家が横這いかやや増である(図2)。一方、漁獲量はヒラメ・カレイ類主体に年間600トン前後から800トン前後で比較的安定していたが、最近になって300トン台に落ち込んでいる(図3)。

操業の規制については茨城県漁業調整規則或いは漁業者自身による申し

合わせ等によって、操業期間・同時間・網目・網規模等が定められ(表2)、久慈浜地域では操業日を漁業者の投票によって決める(益子1991、佐久間1992)等の自主管理が行なわれている。

(2) 固定式刺網漁業の水揚げ日数・同船数について
 漁業権漁場である大洗町地域(大洗町・磯浜両漁協)・鹿島灘漁協・波崎共栄漁協の1991年の漁期は5月20日から9月30日までであったが(表2)、この時期の水揚げ日数は鹿島が最も多く92日、次いで波崎の81日、大洗65日であった。これを旬別で見ると、8月中旬と9月に少なく(図4)、この傾向は前年の1990年でもほぼ同じであった。そして、この期間の総水揚げ船数は鹿島が約2400隻、次いで大洗1100隻、波崎900隻で、旬別にみると(図5)3地域とも着業初期の5月下旬に多いが、その後やや減少し7月に入って再び増え、8月中旬以降大幅に少なくなっていた。旬別水揚げ日数(図4)と同水揚げ船数(図5)から旬別の1日平均水揚げ隻数を算出すると(図6)、鹿島が多いときで40隻前後、大洗が25隻前後、波崎20隻前後で

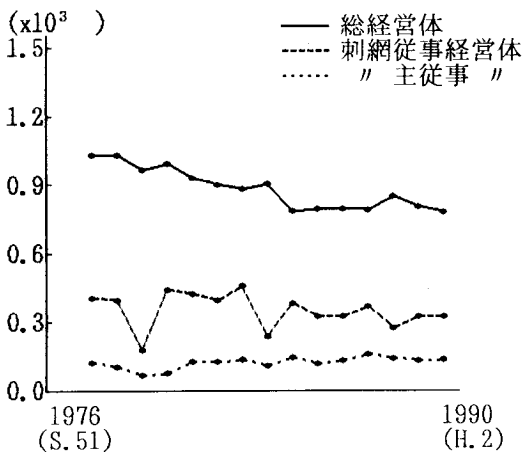


図2 近年の茨城県の総経営体数と刺網漁業経営体数

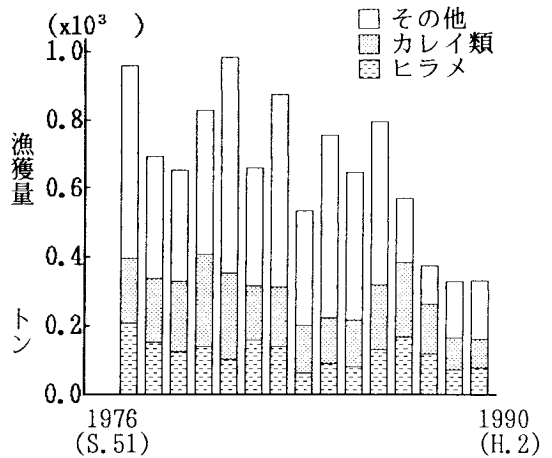


図3 近年の茨城県の刺網漁業漁獲量

表2 茨城県における固定式刺網漁業の現行規制の概要

項目	規 制 内 容
操業期間	許 可：2ト未満船 12月1日～翌年9月30日、2～5ト船 6月10日～8月10日 漁業権：平成3年は5月20日～9月30日
出漁日	許 可：久慈浜地域では投票による
操業時間	許 可：15時～翌朝8時 漁業権：平成3年は1昼夜漬け（前年までは2～3日漬け）
網 目	許 可：6cm以上
網規模	許 可：2ト未満船 500m以内、2～5ト船 2000m以内(15反つなぎ3建) 漁業権：5月20日～6月30日 6000m以内(6反つなぎ20建)（平成2年より） 7月 1日～9月30日 7500m以内(6反つなぎ25建)

あった。なお許可漁業である久慈浜地域（久慈町・久慈浜丸小両漁協）は6月10日から8月10日までの期間に計18日の水揚げで、水揚船数は約330隻であった。

(3) 固定式刺網漁業の水揚量・同金額について
漁業権漁場である鹿島灘海域の1991年の旬別水

揚量の推移をみると（図7）、水揚開始から第2旬目（6月上旬）には減少し、その後増加して7月中旬にピークとなり、8月中旬以降減少なくなっていた。そして、旬別1日1隻当たりの水揚量を算出してみると（図8）、増減の推移は同じであるが7月のピークは緩やかで、8月中旬以降の減少も旬別水揚量（図7）ほど急ではなかった。ま

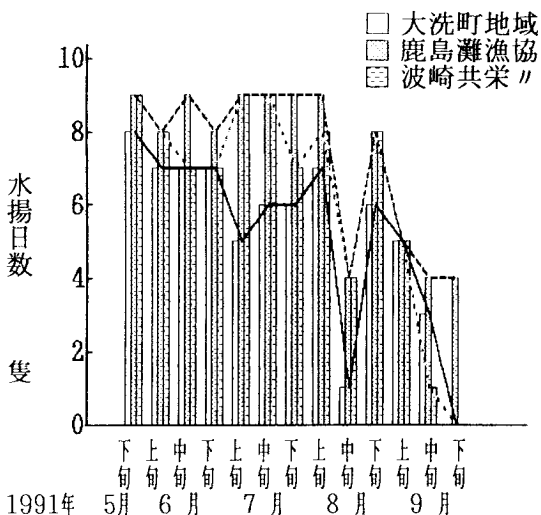


図4 固定刺網旬別地区別水揚日数

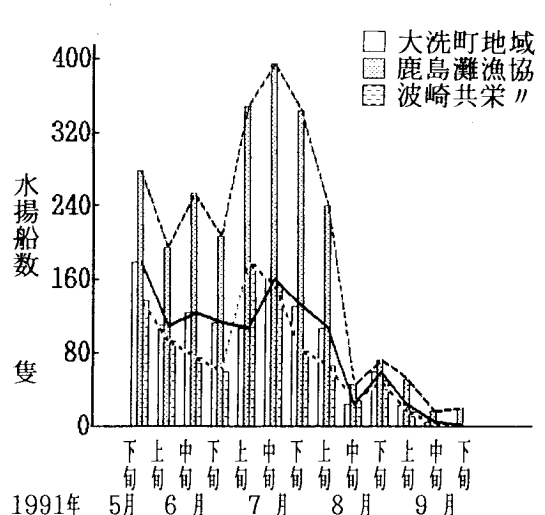


図5 固定刺網旬別地区別水揚船数

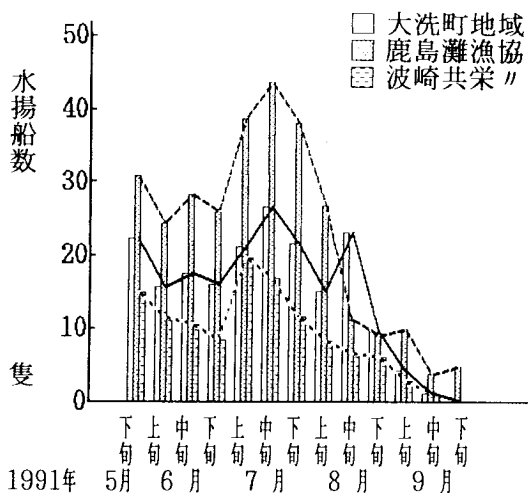


図6 固定刺網旬別地区別1日平均水揚船数

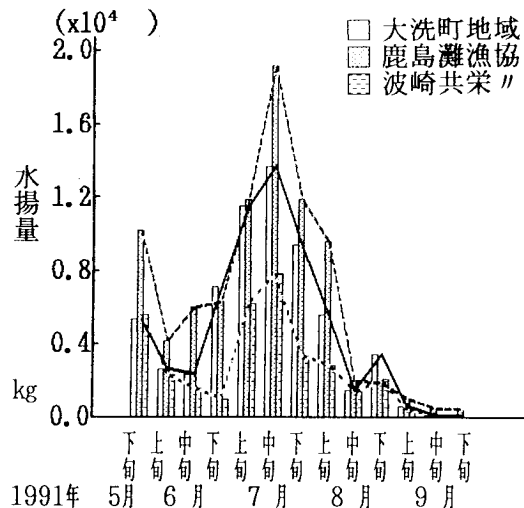


図7 固定刺網旬別地区別水揚量

た、水揚量が最も多いのは鹿島灘漁協で、次いで大洗・波崎と水揚隻数の順であったが、一日1隻平均では大洗の6月下旬から8月下旬が多く、鹿島・波崎の1.5倍から3倍であった。一方、水揚金額は水揚量と同様に水揚開始直後の5月下旬

に多く、その後減少して7月に再び増加していたが(図9)、3地域とも7月のピークは5月上旬より低かった。そして、1日1隻当たりでは(図10)、水揚量で明瞭であった7月のピークがみられず、漁期始めと漁期末が高くなっていた。

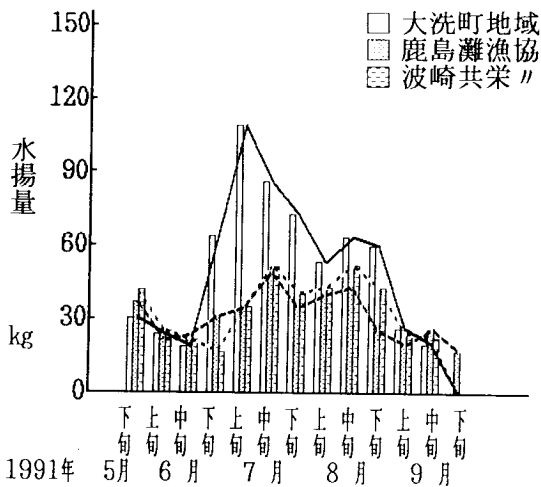


図8 固定刺網旬別地区別1日1隻平均水揚量

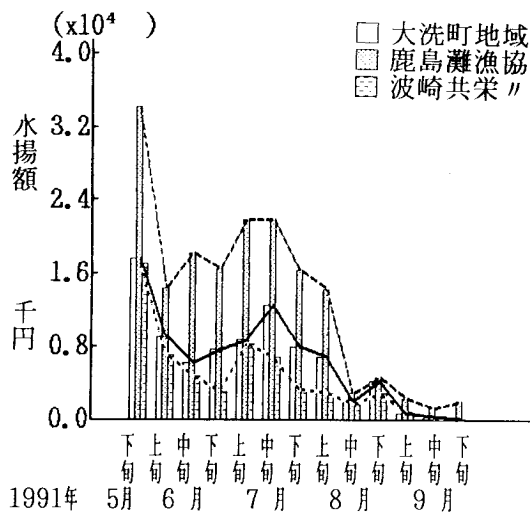


図9 固定刺網旬別地区別水揚額

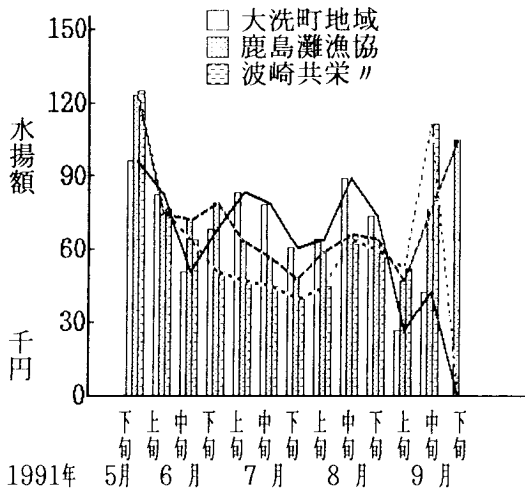


図10 固定刺網旬別地区別1日1隻平均水揚額

(4) 固定式刺網の対象魚種と漁期について

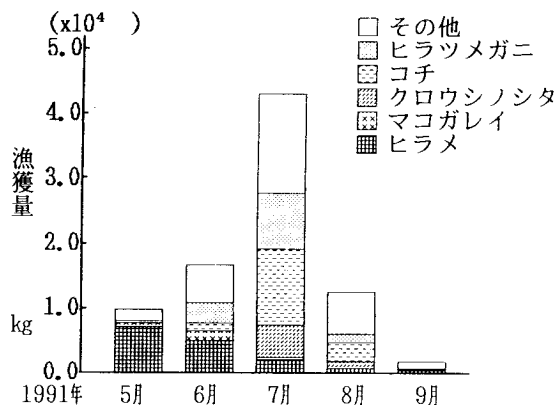
鹿島灘海域の3地域に久慈浜地域を加えて、1991年の魚種別水揚量をみると(表3)、波崎と久慈浜ではヒラメが第1位で、大洗と鹿島ではコチが第1位であった。そのほか主な魚種はイシモチ・クロウシノシタ・ヒラツメガニ等であり、また、久慈浜ではマコガレイが第2位であった。一方、金額でみると(表4)、久慈浜・鹿島・波崎ではヒラメが第1位であったが、大洗ではコチが第1位、ヒラメは第2位であり、そのほか水揚量が多かったヒラツメガニ・クロウシノシタのほか、鹿島灘海域では水揚量上位ではなかったマコガレイ・メイタガレイ・ガザミが3~5位となっていた。

表3 固定刺網地区別主要魚種別水揚量 1991年

単位：トン

地区	久慈浜			大洗町			鹿島灘			波崎共栄		
	順位	魚種	量	順位	魚種	量	順位	魚種	量	順位	魚種	量
1	ヒラメ	2.1	25	コチ	20.7	33	コチ	16.0	19	ヒラメ	8.9	26
2	マコガレイ	1.7	20	イシモチ	9.7	15	ヒラメ	14.3	17	クロウシノシタ	5.7	17
3	コチ	1.0	12	クロウシノシタ	9.4	15	ヒラツメガニ	13.3	16	イシモチ	3.6	11
4	クロウシノシタ	0.8	9	ヒラメ	5.4	9	クロウシノシタ	6.2	7	ヒラツメガニ	3.5	10
5	メイタガレイ	0.6	7	ヒラツメガニ	2.6	4	イシモチ	5.5	7	コチ	3.0	9
	その他	2.4	28	その他	14.9	24	その他	28.2	34	その他	9.3	27
総計		8.5			62.7			83.4			34.0	

水揚量の最も多い鹿島灘漁協の主な漁獲魚種について月別の水揚量をみると(図11)、ヒラメは5月に多く、6月以降少なくなっており、逆にコチ・クロウシノシタ等は6月から7月に増加していた。そこで、主要魚種別に4地域の旬別1日1隻当たり水揚量の推移をみると(図12・13)、5・6月(漁期前半)に主として漁獲された魚種がヒラメ・マコガレイ・ナメタガレイ・メイタガレイ・アイナメ・マダイ等、漁期半ば以降がコチ・クロウシノシタ・ヒラツメガニ・イシモチ・マダコ・ネズッコ等であった。



(5) 固定式刺網の漁場について

標本船の操業記録に基づいて、主漁獲対象がヒラメ・カレイ類等である5月下旬から6月中旬ま

図11 鹿島灘漁協の固定刺網の主要種別月別漁獲量

表4 固定刺網地区別主要魚種別水揚額 1991年

単位：百万円

地区	久慈浜			大洗町			鹿島灘			波崎共栄		
	魚種	額	%	魚種	額	%	魚種	額	%	魚種	額	%
1	ヒラメ	9.5	43	コチ	21.3	26	ヒラメ	59.6	35	ヒラメ	30.1	52
2	マコガレイ	7.3	33	ヒラメ	18.8	23	コチ	20.0	12	ヒラツメガニ	5.1	9
3	コチ	1.4	6	マコガレイ	11.4	14	ヒラツメガニ	16.2	10	クロウシノシタ	4.3	7
4	ナメタガレイ	0.9	4	クロウシノシタ	9.4	11	マコガレイ	14.7	9	コチ	3.8	7
5	クロウシノシタ	0.9	4	カレイ	4.3	5	クロウシノシタ	7.6	4	メイタガレイ	3.7	6
	その他	2.3	10	その他	17.4	21	その他	51.5	30	その他	10.9	19
総計		22.1			82.6			169.6			57.9	

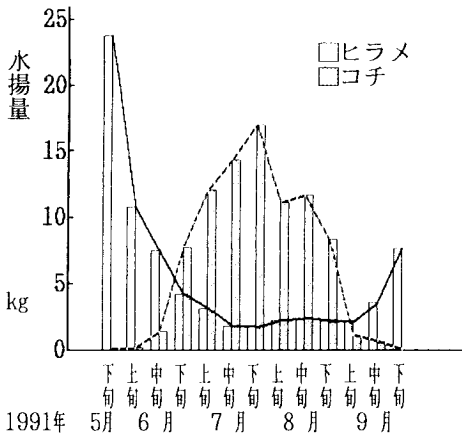


図12 固定刺網のヒラメ・コチ旬別1日1隻平均水揚量（4地区）

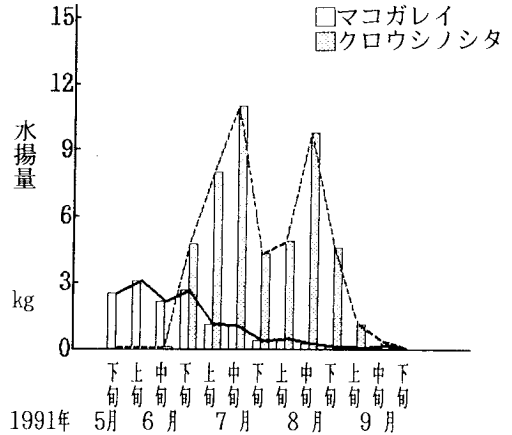


図13 固定刺網のマコガレイ・クロウシノシタ旬別1日1隻平均水揚量（4地区）

と、コチ・クロウシノシタ等が主体の6月下旬以降に大別して漁場図を描いてみると（図14）、漁期前半はほぼ沖側、半ば以降は沿岸で操業していた。そこで、標本船の主漁獲魚種と水深を旬別に整理してみると（図15）、着業当初の5月から6月上旬は推進30m前後から50m前後の海域で主としてヒラメが漁獲され、その後水深30m前後から10m前後の海域に移り、魚種もカニ類からコチ・イシモチ・ウシノシタ（ウシカ）類等となっていた。

(6) 固定式刺網の網目と主漁獲魚種及び漁場について

標本船に記載されている固定式刺網の網目をみると、最も大きい目合いが6寸、最小が2.5寸であった。これらの網目で主に漁獲されている魚種を見ると（図16）5～6寸目でヒラメ・カレイ類、4～4.5寸目でヒラメ・カレイ類にカニ類・タコ類、2.5～3寸目でコチ・ウシノシタ類・イシモチとなっていた。そして、カニ類を除いて4寸以上の大きい目合いの漁具は水深25m前後から沖側で使われており、2.5～3寸目の小さい網目では

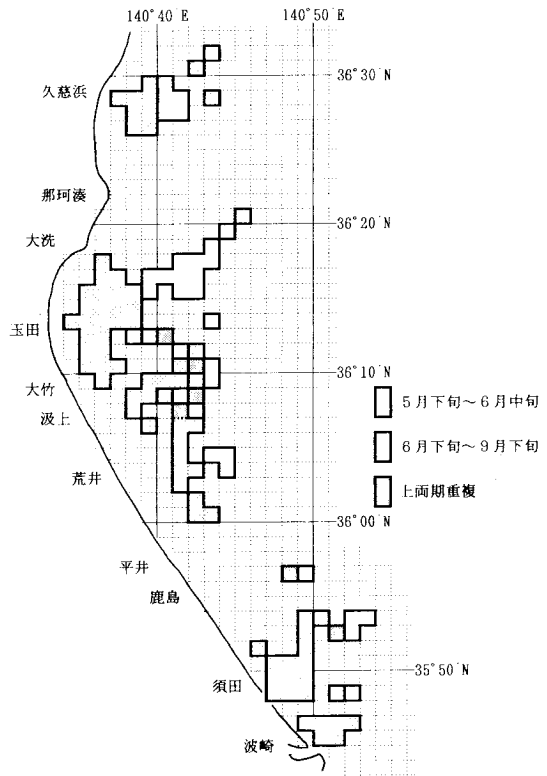


図14 標本船報告に基づく固定刺網操業海域（1991年）

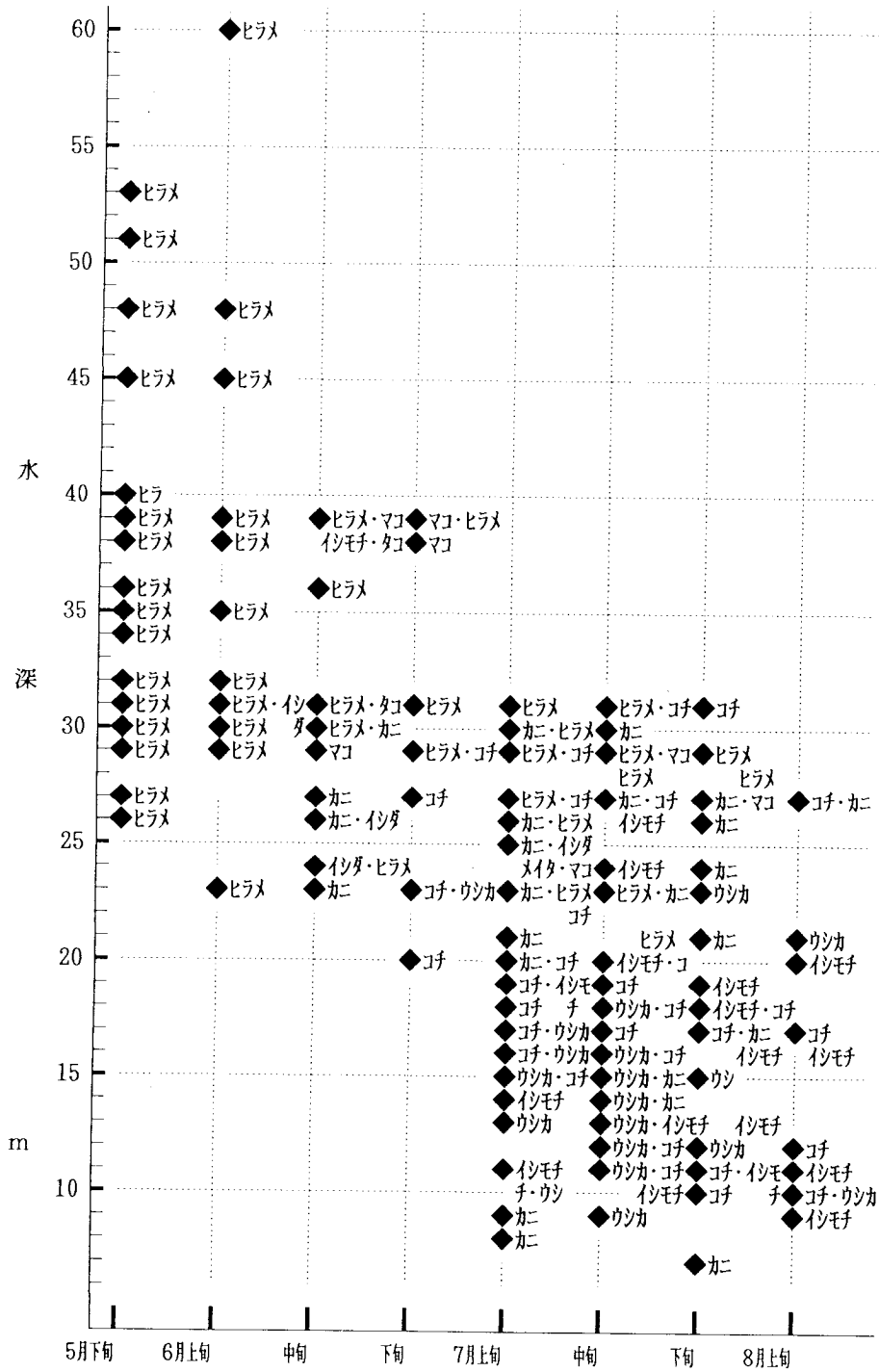


図15 鹿島灘海域（大洗町地域・鹿島灘漁協・波崎共栄漁協）における固定刺網の旬別操業水深と主漁獲魚種（1991年）

茨城県の固定式刺網漁業について

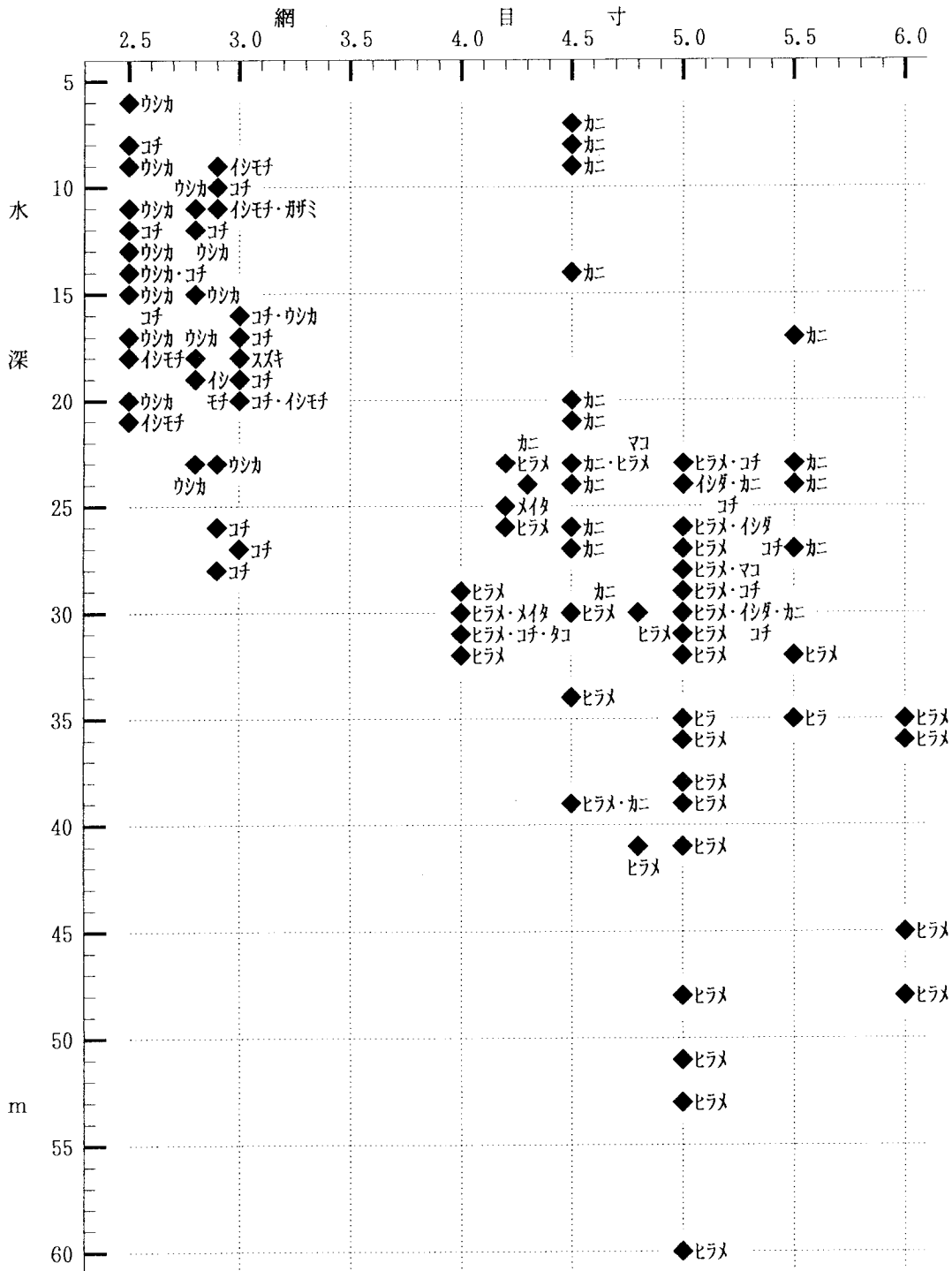


図16 鹿島灘海域（大洗町地域・鹿島灘漁協・波崎共栄漁協）における固定刺網の網目と主漁獲魚種及び水深（1991年）

水深25m前後から10m前後の浅海域であった。ここで、水深10m前後から30m前後と比較的広い範囲で漁獲されているコチについて、小さい網目(2.5~3寸)と大きい網目(4.2~5寸)に大別して漁獲状況を見ると(図17)、網規模50反当たりで、大きい目合いでは20kg以下であったが、小さい目合いでは100kgを超える例があり、また、同一水深(26~27m)で比較しても小さい目合いで漁獲量が多かった。

(7) 固定刺網によるヒラメの漁獲状況について

固定式刺網によるヒラメの漁獲が漁期前半に多いことはすでに述べたが、1991年の大洗・鹿島・波崎3地域の月別魚種別水揚量を見ると(表5)、

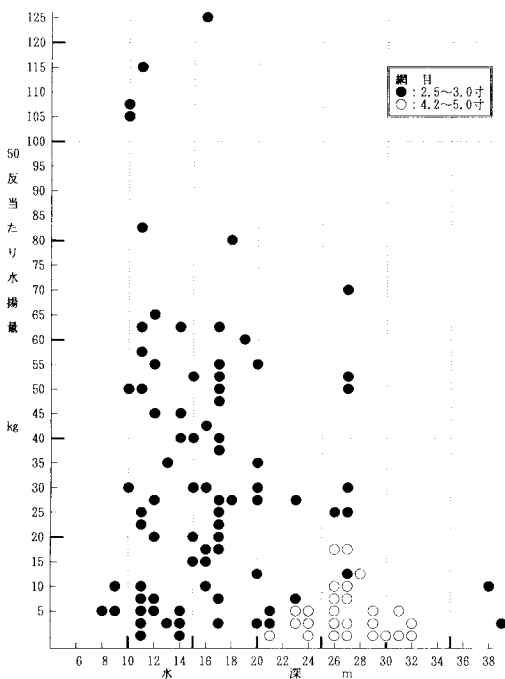


図17 固定刺網におけるコチの漁獲水深と漁獲量及び網目(1991年)

5月の総水揚量に占めるヒラメの割合は57%から76%に達している。水揚開始日が5月20日なので、旬別に水揚量を見ると(図18)、3地域いずれも着業当初の5月下旬に最も多く、その後急に減少していた。なお、固定式刺網によるヒラメの漁獲銘柄は「中平・大平・特平」と呼ばれている大型魚主体に、「小平」と呼ばれる中型魚混じりであり(図18)、銘柄「小そげ・そげ」と呼称される小型魚はわずかであった。3地域の銘柄と体重の関係については表6に示した。

4 考 察

茨城県の固定式刺網漁業の最も重要な対象魚種は、漁業権漁業である鹿島灘海域においても、許可漁業の久慈浜地域においてもヒラメであることは、漁獲量(表3)とその漁獲金額(表4)から明らかである。そして、鹿島灘海域では漁期前半が主漁期で(表5、図15・18)、大きい目合いの漁具で(図16)、大・中型魚(銘柄小平~特平)主体に(図18)、主に沖側の漁場で(図14・15・16)操業されている。このような推移については鈴木(1990)も述べており、着業後約1カ月は沖側の天然磯で操業し、ヒラメ・カレイ類の漁獲減により、漁獲対象が変わり浅海平坦域に移るとしている。また、この時期つまり5月下旬から6月のヒラメは「成魚」で「産卵期」のものである(図19、茨城水試1975)。鹿島灘海域の固定式刺網でのヒラメの漁獲が着業初期に多く、その後急減する理由としては、この時期つまり産卵期に水深30~50m前後の海域に集まっていたものが、間もなく移動して漁場から逸散するためか、または集中的な漁獲による間引きによって漁獲成績が低下するためか、いずれかが考えられる。そこで着業開始が鹿島灘海域より2旬遅い(表2、6月10日)久慈浜地域の漁獲状況を見ると(図20)、1日1

茨城県の固定式刺網漁業について

表5 固定刺網月別地区別主要魚種別水揚量 1991年

単位：トン

大洗	5 月		6 月		7 月		8 月		9 月	
月計	—	5.3	—	11.9	—	34.5	—	10.4	—	0.6
1	ヒラメ	3.0	コチ	2.7	コチ	14.5	コチ	3.5	イシモチ	0.1
2	マコガレイ	0.6	クロウシソツタ	2.1	クロウシソツタ	6.6	イシモチ	2.0	クロウシソツタ	0.1
3	メイトガレイ	0.3	ヒラメ	1.5	イシモチ	6.2	クロウシソツタ	1.2	ガザミ	0.1
4	ヒラツメガニ	0.2	イシモチ	1.4	アカリシカ	1.5	ネズボ	0.7	ヒラツメガニ	0.1
5	アイナメ	0.1	マコガレイ	1.2	ガザミ	1.5	ガザミ	0.6	コチ	0.0
その他	—	1.1	—	3.0	—	4.3	—	2.5	—	0.3

鹿島	5 月		6 月		7 月		8 月		9 月	
月計	—	10.2	—	16.4	—	42.8	—	12.4	—	1.7
1	ヒラメ	6.8	ヒラメ	4.8	コチ	11.9	コチ	2.9	ヒラメ	0.3
2	マコガレイ	0.7	ヒラツメガニ	3.2	ヒラツメガニ	8.3	マダコ	1.6	ヒラツメガニ	0.2
3	マダイ	0.3	マコガレイ	1.4	クロウシソツタ	5.0	ヒラツメガニ	1.3	クロウシソツタ	0.0
4	ヒラツメガニ	0.3	コチ	1.2	イシモチ	4.2	クロウシソツタ	1.1	コチ	0.0
5	アイナメ	0.2	イシガレイ	0.8	ヒラメ	1.9	イシモチ	0.9	マダイ	0.0
その他	—	1.8	—	4.9	—	11.5	—	4.5	—	1.1

波崎	5 月		6 月		7 月		8 月		9 月	
月計	—	5.6	—	4.7	—	17.2	—	5.8	—	0.4
1	ヒラメ	4.2	ヒラメ	2.8	クロウシソツタ	4.5	クロウシソツタ	1.1	ヒラメ	0.1
2	メイトガレイ	0.4	メイトガレイ	0.5	イシモチ	2.4	ヒラツメガニ	0.8	イシモチ	0.1
3	マコガレイ	0.2	マコガレイ	0.2	ヒラツメガニ	2.3	コチ	0.8	マダコ	0.0
4	マダコ	0.2	マダコ	0.2	ヒラメ	1.3	イシモチ	0.6	アイナメ	0.0
5	ホウボウ	0.1	アイナメ	0.2	ニベ	0.7	ヒラメ	0.4	コチ	0.0
その他	—	0.4	—	0.9	—	6.0	—	2.0	—	0.1

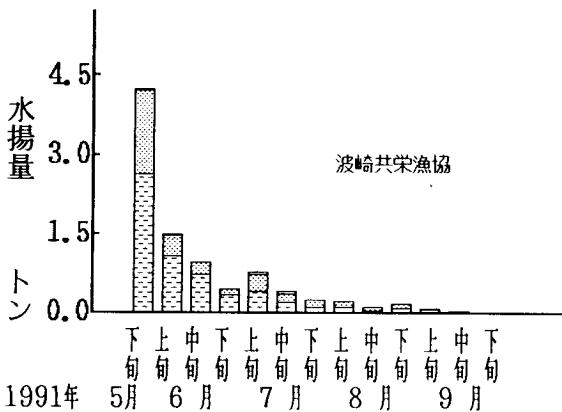
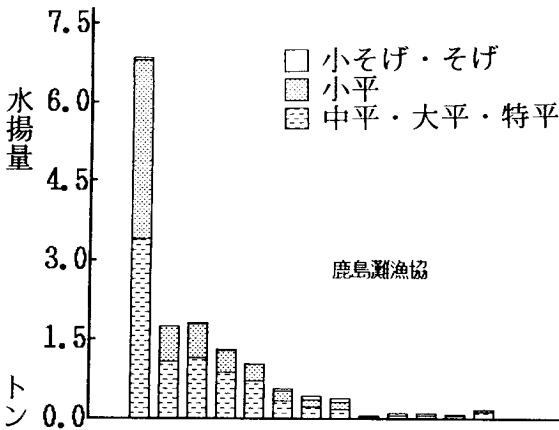
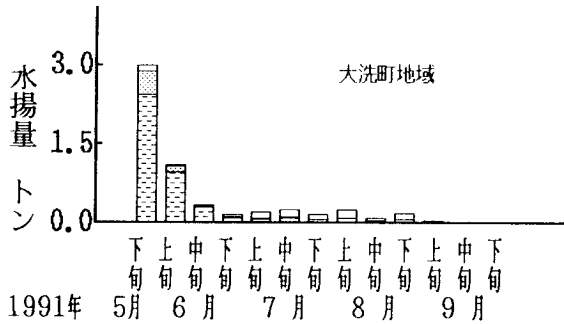


図18 固定刺網によるヒラメの旬別地区別銘柄別水揚量

隻当たり漁獲量はやはり着業初期に多く、その後減少しており、その推移傾向は鹿島灘海域と同様である。このことは、この時期の本県海域のヒラメが短期間にまとまって大きく移動せず、漁獲の減少は集中的・連続的な操業によるとみてよいのではなかろうか。なお、図20に示した久慈浜地域の1日1隻当たり漁獲量は漁獲当初の6月中旬で12kg程度で、鹿島灘漁協のそれと比較すると約3分の1と少ないが、網規模でみると(表2、久慈が2km、鹿島6km)同程度となる。

鹿島灘海域の産卵期のヒラメが短期間に移動・逸散するものではないのであれば、産卵期の親魚を保護し、再生産を助長するという観点で、現在の鹿島灘海域の漁期の設定は検討が必要であろう。理想的には産卵期の漁獲を禁止とすればよいわけであるが、漁家の経営からみると非現実的である。そこで、鹿島灘共同漁業権漁場を行使する5漁協(鹿島灘漁業権共有組合連合会)が、漁期等を協議する場における検討の材料として、取り敢えず漁期を1旬遅らせて6月1日からとした場合の水揚金額について試算してみた。試算の動機は、益子(1991)も久慈浜地域の調査で述べているが、ヒラメの主な出荷先である東京市場の価格が例年春季に安い(図21)という水産業改良普及員の指摘に基づいている。

試算の前提は、ヒラメの価格が5月を底値として漁期が進むにつれて上昇し(図21)、一方、着業開始が1旬遅くなっても、ヒラメ他の漁獲状況は大きく変わらないとする。そして、5月下旬の漁獲実績を6月上旬分とし、漁獲金額算出のための単価を6月上旬の実績単価とし、試算の期間はすでに述べたヒラメ主体の漁期である6月とした。従って、漁獲実績から削除されるのは、6月下旬分となる。また、この時期の固定式刺網では、結果の項に示したが、ヒラメと共にカレイ類等(図12・13、表5)が漁獲されているので、これらの

表6 ヒラメの銘柄と体重 (kg)

大洗町		鹿島灘漁協		波崎共栄漁協	
呼称	体重	呼称	体重	呼称	体重
小そげ	~0.1	じやみそげ	~0.1		
そげ	0.2~0.5	小そげ	0.2~0.5	小そげ	0.2~0.5
小平	0.6~0.9	そげ	0.6~0.9	そげ	0.6~0.9
中平	1.0~1.4	小平	1.0~1.9	小平	1.0~4.9 (大半中平に)
大平	1.5~3.9	中平	2.0~2.9	中平	
特平	4.0~5.9	大平	3.0~4.9	大平	
大特	6.0~	特平	5.0~9.9	特平	5.0~
		大特	10.0~		

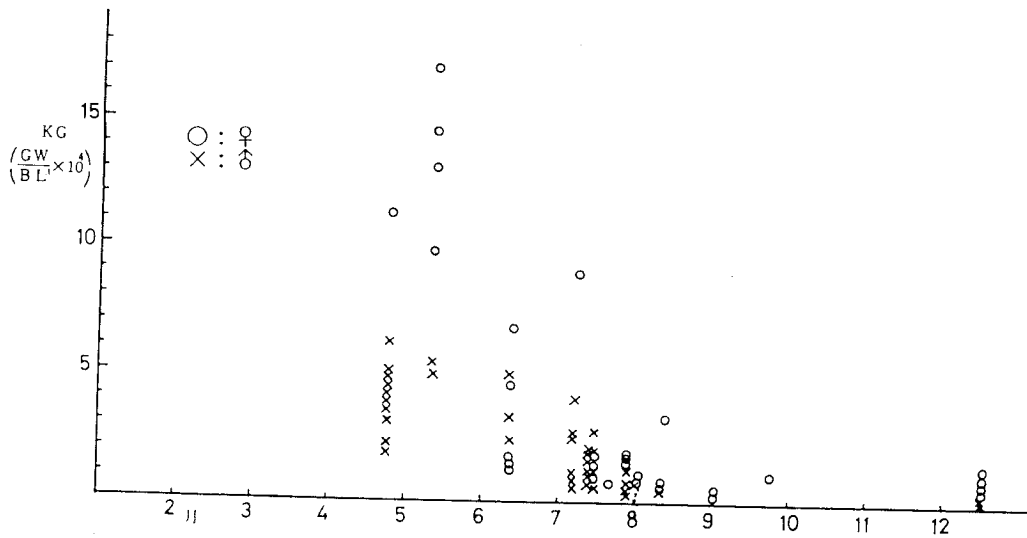


図19 ヒラメの成熟係数 (KG) の推移

〔茨城水試 (1975) : 太平洋北区栽培漁業漁場資源生態調査結果報告書〕

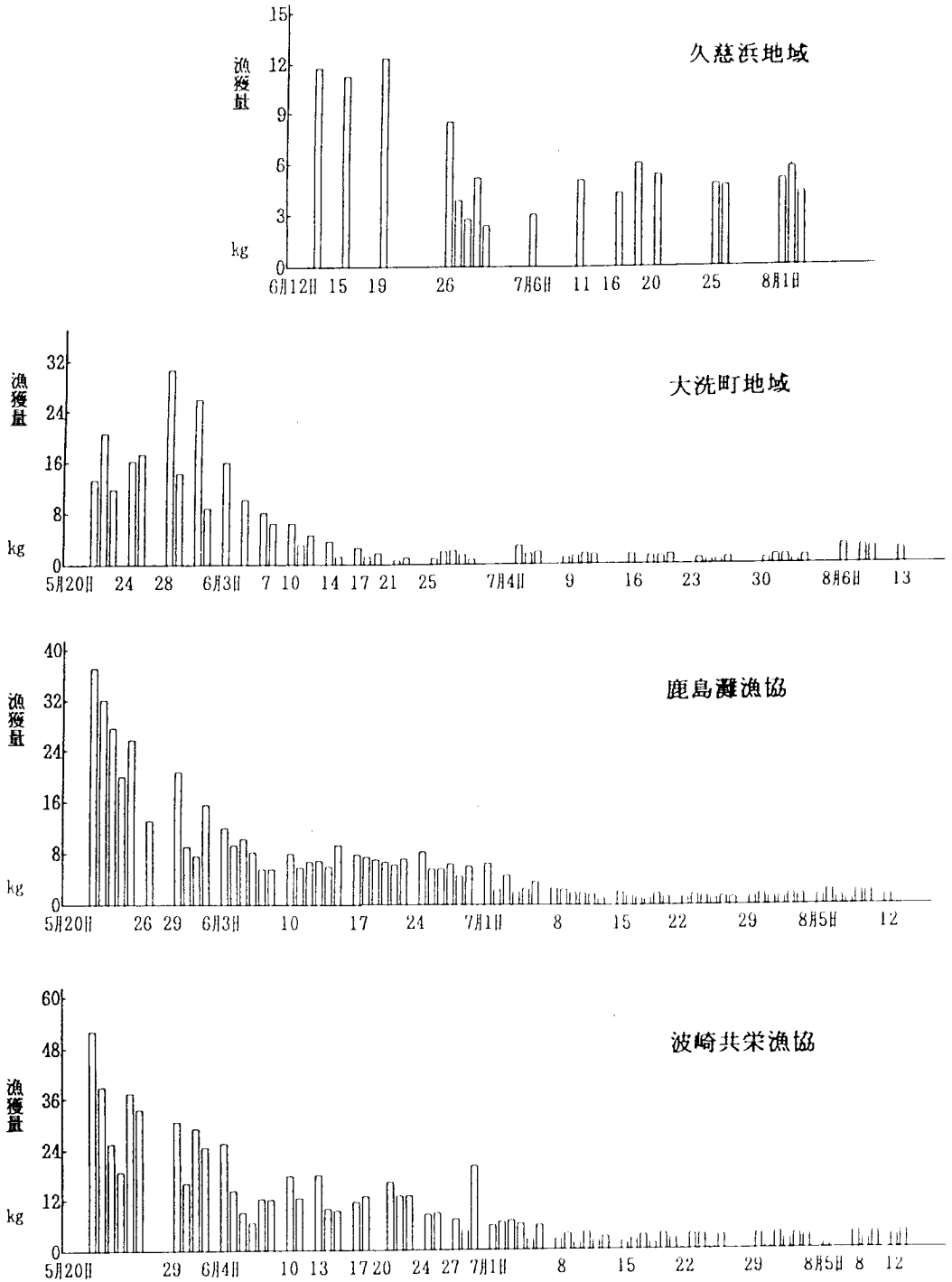


図20 固定刺網によるヒラメの1日1隻当たり漁獲量の推移

茨城県の固定式刺網漁業について

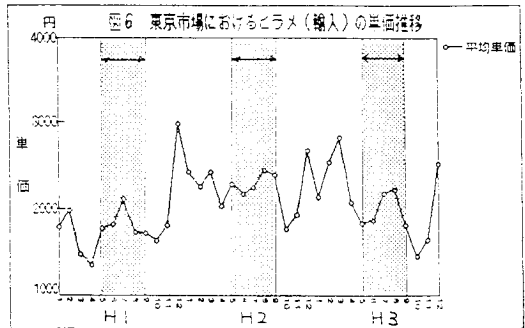
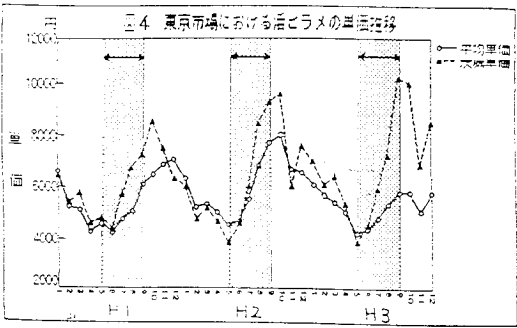
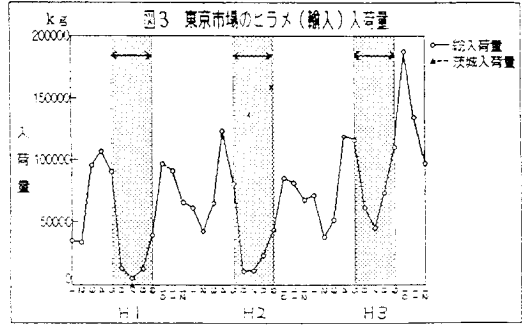
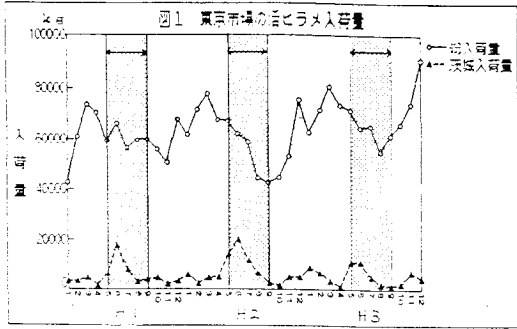


図21 東京市場におけるヒラメの入荷量と単価の推移 (茨城県水産業改良普及員室資料)

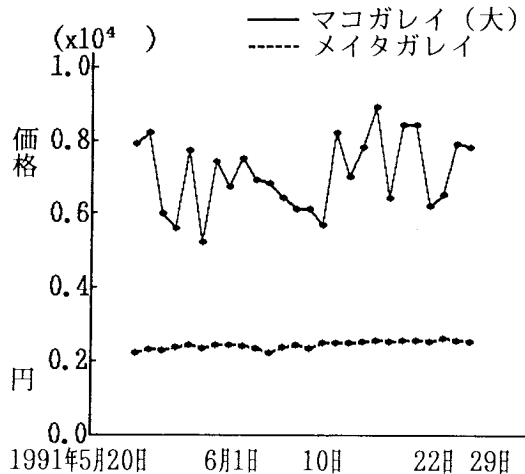
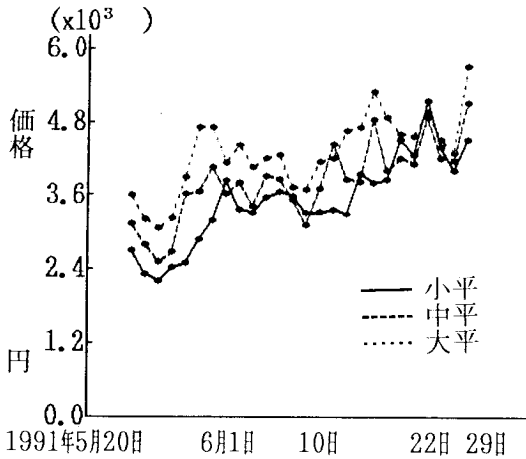


図22 大洗地域におけるヒラメの日別平均価格 (円/kg) の推移

図23 大洗地域におけるマコガレイ・メイタガレイの日別平均価格 (円/kg) の推移

漁期前半に水揚げされる主な魚種も、ヒラメと同様の方法で試算し、水揚金額に合算した。なお、1991年の実績価格をみると漁期前半に漁獲される全ての魚種の価格が、漁期の進行と共に上昇するわけではなく、むしろ横這い傾向のものが多く、なかには下降するものもある(図22、23)。

試算結果を表7に示したが、鹿島灘海域3地域のうち大洗では、6月下旬分の水揚減を補いわずかではあるが実績を上回る額となった(図24)。しかし、鹿島地域では約600万円、波崎地域で200万円程度の実績を下回る値となった。ここで、実績水揚額を下回った鹿島・波崎両地域の5月下旬の1日1隻平均水揚額をみると(表7)約11万円であり、また、1日平均水揚船数は(表7)それぞれ30隻・15隻で、旬計水揚額と水揚日数からも算出できるが、1日平均の鹿島地域の水揚額は約340万円であり、波崎地域では約180万円である。つまり、実績を下回った鹿島・波崎両地域の実績と試算の差額600万円と200万円はいずれも水揚日数2日で補われることになる(5月30日からの水揚開始)。ただし、試算では1口1隻平均水揚額の約1万円程度の上昇(表7)と、水揚口数の7

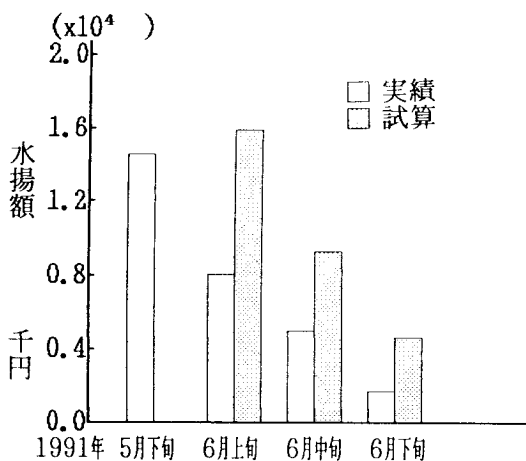


図24 固定刺網の5月20日水揚開始の旬別水揚額実績と6月1日水揚開始の試算水揚額

日程度の減少が見込まれるのに対し、操業経費の減少を考慮していない。固定刺網漁業の操業経費は日毎の水揚の多少に関わりなく、操業毎に漁具の整理等に一定額を要するので、その資料が整備され、水揚額ではなく所得額で検討すれば、漁期の短縮にとってはプラスに影響することになる。

1旬程度の漁期の短縮がヒラメの再生産にどの程度プラスとなるかをここで具体的に示すことはできない。しかし、水産試験場で実施している「資源管理型漁業推進総合対策事業」の1992年漁期の調査でも、5月下旬には1部放卵しているものがあり、たとえわずかな期間でも漁家経営上問題なく、ヒラメ資源にとって有益とのことで、漁業者自らの取り決めによって漁期の短縮が行なわれるのであれば、資源管理・培養にとって、大きな前進であろう。また、5、6月の鹿島灘海域の3地域で着業されている漁業は(図25)、固定式刺網漁業の他に船曳網・底曳網・一本釣り・延縄釣り・曳縄釣り等であり、固定式刺網が開始される直前の5月中旬は船曳網と曳縄釣りが主な漁業である。1991年5月中旬から6月上旬までの船曳網と曳縄釣りの状況を見ると、5月下旬はいずれも比較的好成績の時期であり(図26・27)、漁船の装備面・漁業者の技術面等の条件が整っていて、これらいずれかに着業することが可能な漁家は、5月上旬から固定刺網に従事するよりも経営上有利であったのではないと思われる。

5 要 約

- 1) 「資源管理型漁業推進総合対策事業」の調査対象漁業である、固定式刺網漁業の二・三の実態について報告した。
- 2) 鹿島灘海域の固定式刺網漁業は、漁業権に基づくものであり、1991年の漁期は5月20日から9月末までであった。

茨城県の固定式刺網漁業について

表7 固定刺網の着業時期の変更による水揚額の試算（1991年、主要種）

大洗町	実		績	試算	差し引き
	5月20~31日	6月	計	6月1日~	
漁期					
水揚金額 千円	14,529	14,571	29,100	29,672	△ 572
水揚船数 隻	178	342	520	409	▼ 111
水揚日数 日	8	21	29	22	▼ 7
1日平均水揚船数 隻	22.3	16.3	17.9	18.6	△ 0.7
1日平均水揚金額 千円	81.6	42.6	56.0	72.5	△ 16.5

鹿島灘	実		績	試算	差し引き
	5月20~31日	6月	計	6月1日~	
漁期					
水揚金額 千円	31,143	36,039	67,182	61,005	▼ 6,177
水揚船数 隻	277	652	929	723	▼ 206
水揚日数 日	9	25	34	26	▼ 8
1日平均水揚船数 隻	30.8	26.1	27.3	27.8	△ 0.5
1日平均水揚金額 千円	112.4	55.3	72.3	84.4	△ 12.1

波崎共栄	実		績	試算	差し引き
	5月20~31日	6月	計	6月1日~	
漁期					
水揚金額 千円	15,961	13,233	29,194	27,321	▼ 1,873
水揚船数 隻	135	222	357	299	▼ 58
水揚日数 日	9	22	31	24	▼ 7
1日平均水揚船数 隻	15.0	10.1	11.5	12.5	△ 1.0
1日平均水揚金額 千円	118.2	59.6	81.8	91.4	△ 9.6

※ 主要種：ヒラメ・イソガレイ・マコガレイ・メタガレイ・ナメタガレイ・マダイ・アイナメ・マダコ

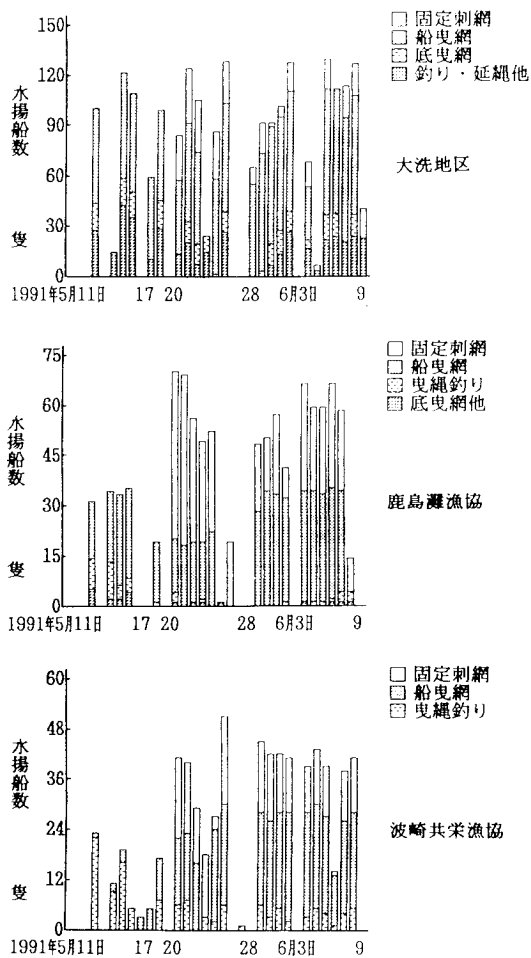


図25 小型船の5月中旬から6月上旬の日別漁業種類別水揚船数

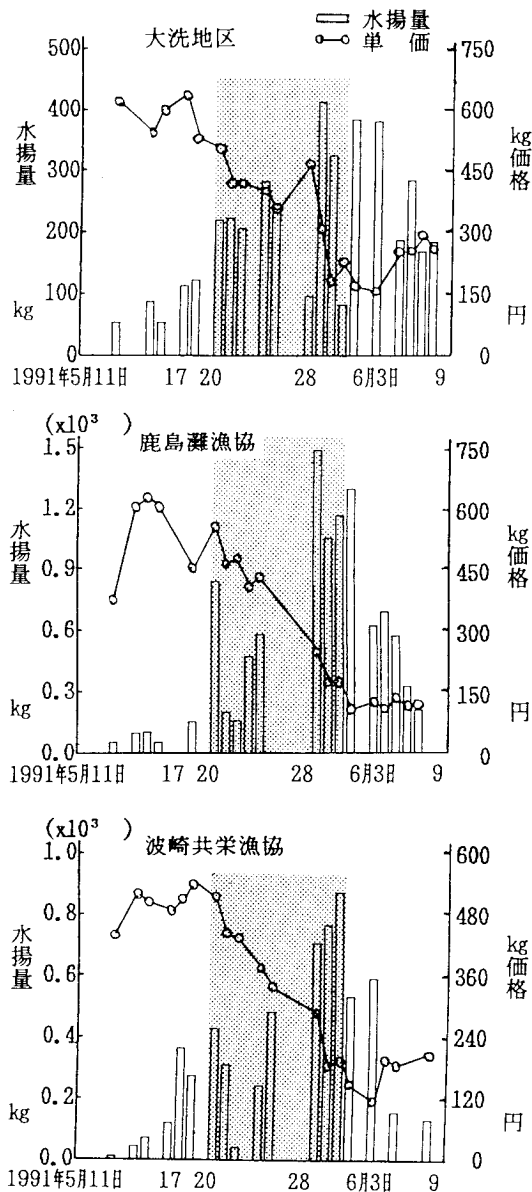


図26 船曳網漁業の5月中旬から6月上旬の「しらす」1日1隻当たり水揚量と平均価格の推移

3) 1991年の鹿島灘海域での水揚げ船数は着業初期の5月下旬と7月に多く、水揚げ量は7月中旬に最も多いが、金額では5月下旬が最高となっている。

4) 主な対象魚種は、漁期前半がヒラメ・カレイ類・アイナメ等、半ば以降がコチ・ウシノシタ類・カニ類・イシモチ等である。

5) 漁場は、6月中旬までは水深30m前後から沖側で、その後同30m前後から岸側に移っている。

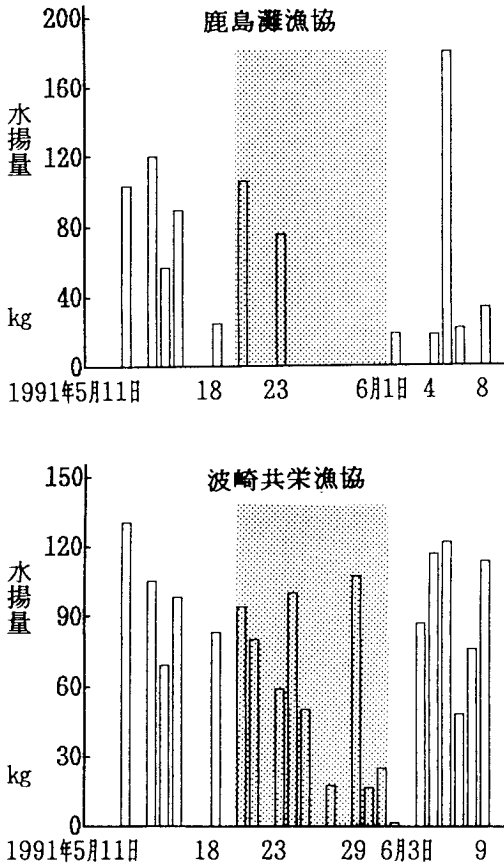


図27 曳縄釣り漁業の5月中旬から6月上旬の「かっお・めじ」1口1隻当たり水揚量の推移

6) 刺網の網目は最大が6寸、最小が2.5寸で、4～6寸目でヒラメ・カレイ類・カニ類・マダコ等、2.5～3寸目でコチ・ウシノシタ類・イシモチ等を漁獲している。

7) ヒラメは5月下旬から6月が主漁期で、漁獲対象は中・大型魚であるが、これらは成魚産卵期のものであり、短期間に漁場から逸散するものではないと考えられる。

8) ヒラメの価格が着業後次第に上昇することから、漁期を1旬(6月1日から)遅らせた場合の水揚げ金額を試算した。大洗町地域では実績を上回ったが、鹿島灘・波崎共栄両漁協ではやや下回った。

9) 1991年の春季の沿岸漁業の経過からみると、5月下旬は刺網の代替え漁業として、シラス船曳網とカツオ曳縄釣りが考えられた。

参考文献

- 1) 茨城県(1992)平成3年度資源管理型漁業推進総合対策事業報告書(印刷中)
- 2) 益子知樹(1991)固定式刺網における漁業管理事例の効果と問題点、茨城水試研報29、65～77。
- 3) 佐久間美明(1992)久慈地区の固定刺網組合、平成3年度資源管理型漁業指導普及事業先進事例調査報告書、全漁連、57～72。
- 4) 鈴木正伸(1990)鹿島灘北部海域における固定式刺網漁業の漁場利用特性について、平成元年度東北海区人工魚礁技術検討会議報告、東北区水研、36～42。
- 5) 茨城県水産試験場(1975)太平洋北区栽培漁業漁場資源生態調査結果報告書。